第2節　小串構内の立会調査

1　医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査

調査地区　小串構内

調査期間　昭和63年6月8日～6月22日

調査方法　工事前における試掘・立会調査

調査面積　約300㎡

調査結果　病棟新営予定地においては、埋蔵文化財確認のための試掘調査を昭和63年1月19日、同年2月15日～3月4日にかけて実施している[1)]。その結果、予定地南西部に設置したトレンチから、ナイフ型石器・削器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石核などが出土した。遺物は現地表下約140cmに堆積する灰色砂層に包含されており、同層は他に大きく時期の異なる遺物を包含していないことから石器群は旧石器時代の所産であると考えられた。予定地内の埋蔵文化財の包含、分布出土状況を踏まえて、埋蔵文化財資料館運営委員会は、旧石器時代の石器群を含む灰色砂層を掘削する場合には、綿密な立会調査が必要と結論づけた。同年5月に病棟の新営計画が具体化した。埋蔵文化財資料館は同運営委員会の指示を受け、同年6月3日、灰色砂層の堆積範囲が新営予定地内南西部の約300㎡に分布範囲をもつことを確認し、のち、6月8日から工事に先立ち立会調査を実施した。

調査方法は、約300㎡の調査範囲内に、5m四方を1マスとした区画を設定し、新営予定地南西隅を起点に南北方向に南からA・B・C…、東西方向に西から1・2・3…と付し、例えば、B－3区と呼んだ。試掘調査の結果、本包含層は、現地表面から150cm下位で検出され、少なくとも約70cmの層厚をもつ。遺物は灰色砂層の検出面から、40cm下位までの間に包含されることが確認されていることから、掘削は各区ごとに、5cmの人工層位を設定し、計8回にわけて行った。

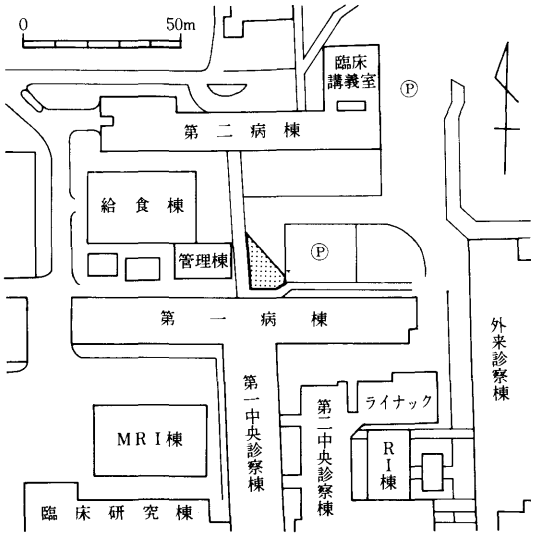


Fig. 9　調査区位置図

出土した石器類には、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・敲石・礫・原石などがあり、表面採集品を含め

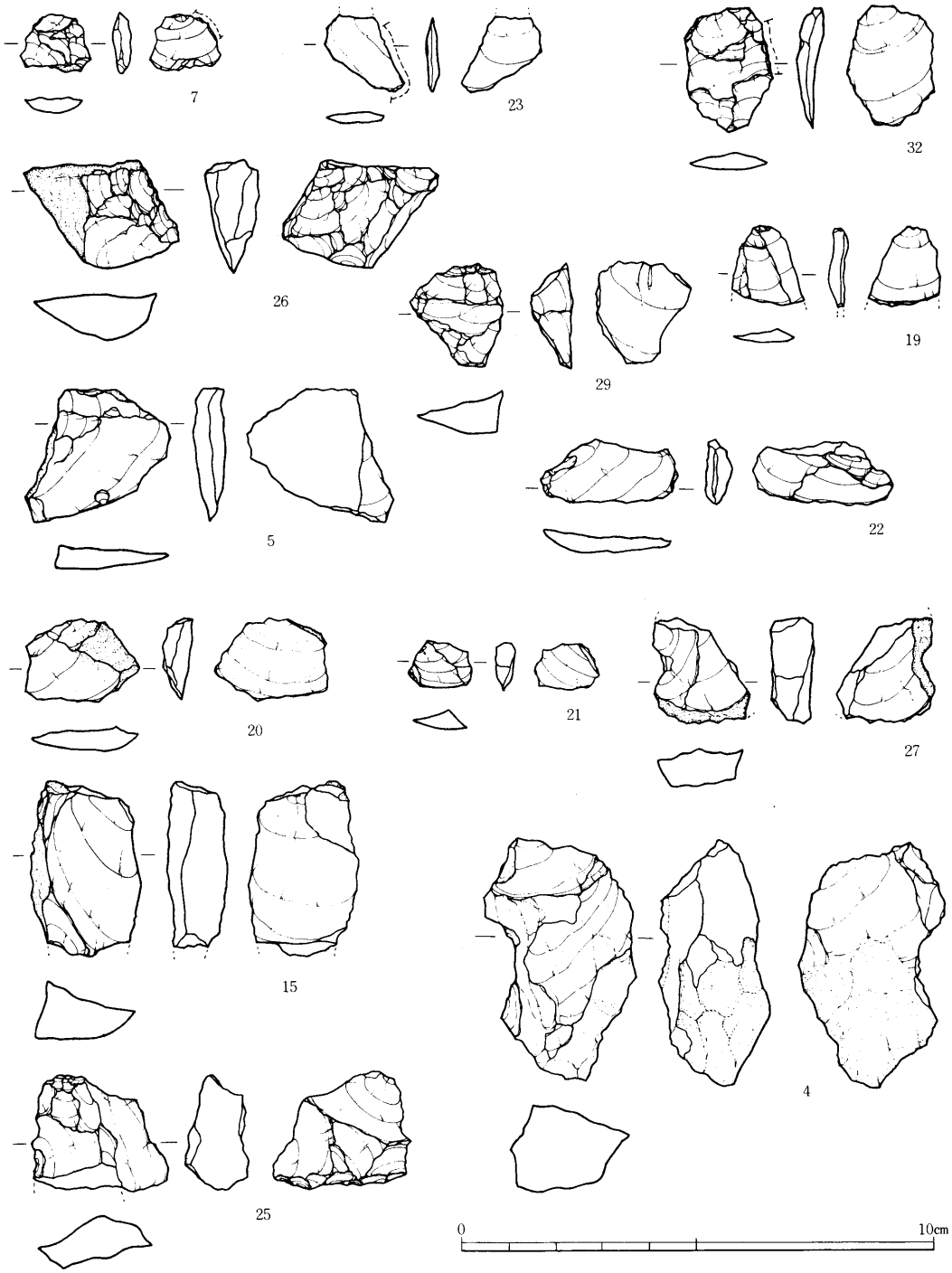


Fig. 10 出土遺物実測図（1）

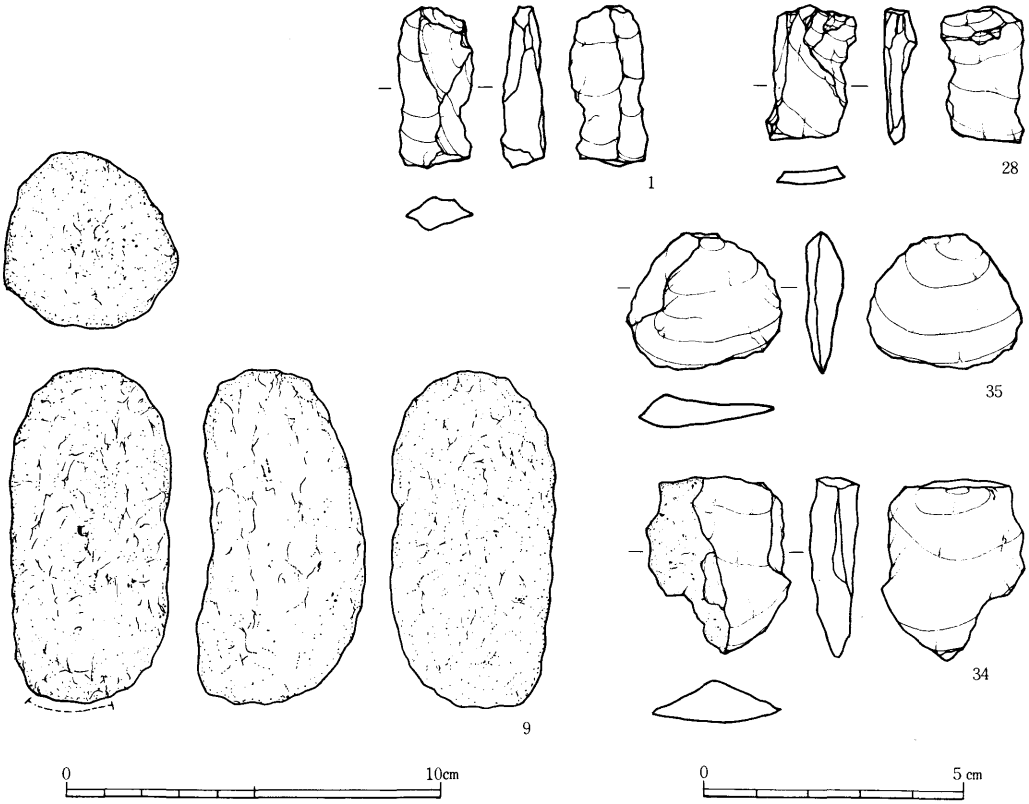


Fig. 11 出土遺物実測図（2）

た出土総点数は38点である。土器類には、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦などがあるが、出土位置は灰色砂層より上層の旧耕作土、青灰色粘質土、淡灰色粘質土からである。土器類については、全て細片であり、顕著なものもないため、ここでは触れず、以下では、石器類について説明を行いたい。なお、サメの歯・自然木が灰色砂層から出土している。

出土遺物（Fig. 10・11, PL. 2・3）

7・23・32は使用痕のある剥片、26・29は二次加工のある剥片、9は敲石、他は剥片である。

7は、腹面右側縁に微細な剥落痕をみる。下端は剥落している。打面部は、剥片剥離と同時に、潰れた可能性が高い。原礫面を残す。23は、打面部を欠損する。背・腹面の判別

はしがたい。使用痕は、背面相当面の右側縁に微細であるが、しっかり残る。32は、細かな平坦打面をもつ。背面右側縁上部に微細な剥落痕をみる。背面の剥離は上下両方向から行われている。26は、背・腹面の判別がしがたい。背面相当面には、原礫面と思われる面が残る。腹面相当面に、二次剥離面を見る。打面等は明かでない。29は、打面を除去するがごとく、リタッチを施す。腹面を見て、右辺は、後剥離しているものと考えられる。5は、原礫面を残す。背面相当面下部の大きな剥離面は左上からの打撃による剥離痕と見ておきたい。風化が著しい。腹面相当面の大部分は、剥落している。打面等は明かでない。19は、下半部欠損。打面部は、本来小さいものか、あるいは、当剥片の剥離時に、ほとんど粉砕したものと思われる。剥離面の方向は同一。素材原形は縦長の剥片と推定できる。20は、不定形の剥片である。打面部は明瞭でない。基部の平坦面は、原礫面で構成されており、原礫面を打面としている。15は、複剥離打面をもつ縦長の剥片である。一側辺に原礫面を残す。4は素材の大半に、不純物の集中部がみられる。使用不可部分を除いた、比較的大型の調整剥片と考えられる。21は、打面部を欠損する。背面の剥離面は、腹面と同一方向である。腹面打面部側は、欠失と考えられ、背面左側縁の剥離面もその可能性が高い。しかし、他の面と比較しても風化の度合いは、差異がなく、欠失・剥落とするならば、その時期は古く考える必要がある。不定形な剥片を素材としたものと思われる。22は、横長の剥片と考えられる。背面相当の三剥離面は、剥落であろう。打点は不明瞭だが、単剥離打面を有する。25は、打点・打面が明らかでない。背面相当面下端を欠損する。腹面下端三枚の剥離面は、その性格が断定できない。27は、上半部を欠損する。よって、打面・打点は欠失している。一側辺には、原礫面を残す。下縁も同様であろう。28は、調整打面をもつ。打点は腹面上部の剥落によって、欠失する。その下位の二面は、バルバスカーの可能性がある。35は、細かな平坦打面を有する。風化が著しい。34は、平坦打面をもつ。背面左側縁は原礫面と考えられる。バルバスカー・打点は明瞭でなく、風化が著しい。1は、縦長の剥片である。細かな原礫面を有する。風化著しい。9は、上下両端に敲打痕が残る。中央部のあばた状のものも敲打痕の可能性がある。

まとめ

灰色砂層は、組成・粒土・色調などから二次堆積と考えられ、病棟新営予定地の南西隅に限定的に分布する。また、石器は、垂直・平面的に遍在することなく、同層から一様に出土した。石器類の帰属時期は、灰色砂層がプライマリーな堆積状況を示していることか

ら、判断材料に乏しいが、昭和62年度に実施した試掘調査の際出土したナイフ型石器・削器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片と同一層から出土していること、使用石材の多様性と、その類似性・形態などから、その大半が後期旧石器時代の所産と考えられる。縄文時代のものも含まれる可能性もないではないが、石器の数に比べて、土器が出土しなかったことは、その可能性を低くしている。したがって、灰色砂層の堆積時期も縄文時代以前に終始した可能性が高いと言える。また灰色砂層は、海抜標高約1.4mほどに堆積しており、下層にも粒土・色調の異なる砂が連続的に堆積していることから、当地に石器群を残した人々の生活圏は、今回の調査地より高地にあったことを示していよう。また、サメの歯や樹木の出土から、当地域は海岸部の浅瀬に相当するものとも考えられ、人々の生活域は前面、あるいはごく近傍に海岸を抱えていたと推察される。

なお、病棟新営予定地内の灰色砂層は、近・現代の構築物の基礎、配管等によって、比較的広範囲に攪乱を受け消失している。しかし、その堆積状況、および北東から南西への旧地形の下降状況から推測して、さらに、給食棟・第一病棟方向へ延びることが十分予想され、当地域での掘削時には事前に十分な調査が必要となろう。　　（木村）

[注]

1)　灰色砂層の検出レベルには高低が存在するが、現地では、全面を人工層位による水平掘削を行い、結果的に一層中に複数の土層が混在することとなった。遺物の取り上げに際して最大限の注意を払ったが、後の整理段階でエラーが、わずかながら含まれていた。即ち、灰色砂層には、土器類は、包含されておらず、これらは、より上層に帰属するものと考えられるが、特定できなかった。

Tab. 2 出土遺物観察表

No.	器　種	石　材	地 区	人工層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	剥　片	チャート	B－2	7	3.0	1.4	0.8	3.07
2	剥　片	チャート	B－2	8				
3	剥　片	蛇紋岩	B－3	1				
4	剥　片	チャート	B－5	1	5.0	3.2	2.3	28.30
5	剥　片	チャート	C－2	1	2.7	3.0	0.6	3.49
6	剥　片	蛇紋岩	C－2	3				
7	使用痕のある剥片	チャート	C－2	4	1.2	1.4	0.4	0.56
8	原　石	チャート	C－2	6				
9	敲　石	安山岩	C－3	2	8.9	4.3	4.5	229.41
10	剥　片	水　晶	C－3	2				
11	原　石	チャート	C－3	2				
12	剥　片	蛇紋岩	C－3	2				
13	礫	チャート	C－3	3				
14	礫	安山岩	C－3	5				
15	剥　片	チャート	C－3	5	3.6	2.3	1.3	10.25
16	剥　片	チャート	C－3	7				
17	剥　片	水　晶	C－4	4				
18	礫	チャート	C－4	4				
19	剥　片	黒曜石	C－4	8	1.7	1.5	0.4	0.55
20	剥　片	チャート	C－4	8	1.7	2.3	0.6	1.75
21	剥　片	黒曜石	C－5	3	0.9	1.3	0.4	0.46
22	剥　片	チャート	D－2	2	1.3	2.9	0.6	1.70
23	使用痕のある剥片	チャート	D－2	2	1.6	1.6	0.25	0.41
24	剥　片	チャート	D－2	6				
25	剥　片	チャート	D－2	6	2.3	2.8	1.3	5.41
26	二次加工のある剥片	水　晶	D－2	6	2.2	3.3	1.1	6.27
27	剥　片	チャート	D－2	7	2.3	2.0	0.9	3.97
28	剥　片	チャート	D－2	8	2.5	1.7	0.55	2.04
29	二次加工のある剥片	チャート	D－3	7	2.2	1.9	0.8	2.84
30	原　石	チャート	D－3	7				
31	剥　片	蛇紋岩	D－4	1				
32	使用痕のある剥片	黒曜石（姫島産）	D－4	2	2.5	1.8	0.5	1.46
33	剥　片	蛇紋岩	D－4	8				
34	剥　片	チャート	D－4	8	3.3	2.7	0.9	6.12
35	剥　片	石英斑岩	D－4	8	2.6	2.9	0.7	4.10
36	原　石	安山岩	E－3	3				
37	原　石	蛇紋岩	E－3	5				
38	剥　片	蛇紋岩	表　採					

2　医学部運動場整備に伴う立会調査

調査地区　小串構内

調査期間　平成元年３月７日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約220㎡

調査結果　工事は小串構内の東端部、職員宿舎の東に隣接する約1650㎡の地域に運動場を新設するものである。運動場予定地内部はマサ土による盛土を行なうが、周辺地域との境界には擁壁とそれに伴うフェンスの設置が計画され、地下の掘削を伴うことから立会調査を実施した。

工事地域は南側に隣接する畑および西側の職員宿舎との比高差が、それぞれ約1.1m、約0.9mと段状に一段高くなっており、調査当初からかなりの盛土が行なわれていることが予想された。

調査は工事のうち最も深く掘削する西辺の擁壁設置部分について行なった。掘削規模は幅約1.7m、現地表面から約1.4mである。その結果、工事範囲内はすべて構内造成時の埋め土で、顕著な遺物包含層、遺構は確認できなかった。

職員宿舎周辺での環境整備に伴う立会調査[1)]では、現地表面から約0.7mまで構内造成時の埋め土を確認している。小串構内の立地および他の地域の土層の堆積状態から、当該地域でも同様な堆積状態を示しているものと考えられ、現地表下約1.6mまでの掘削を伴う工事では埋蔵文化財には影響はないものと判断される。

なお、南側の畑で遺物の表面採集を試みたが、遺物は採集できなかった。

（河村）

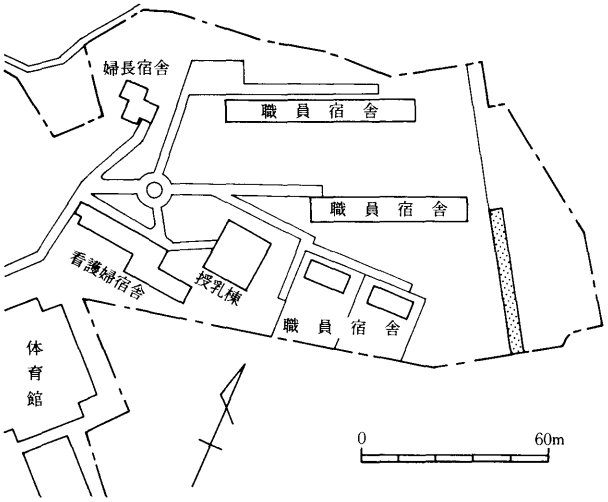


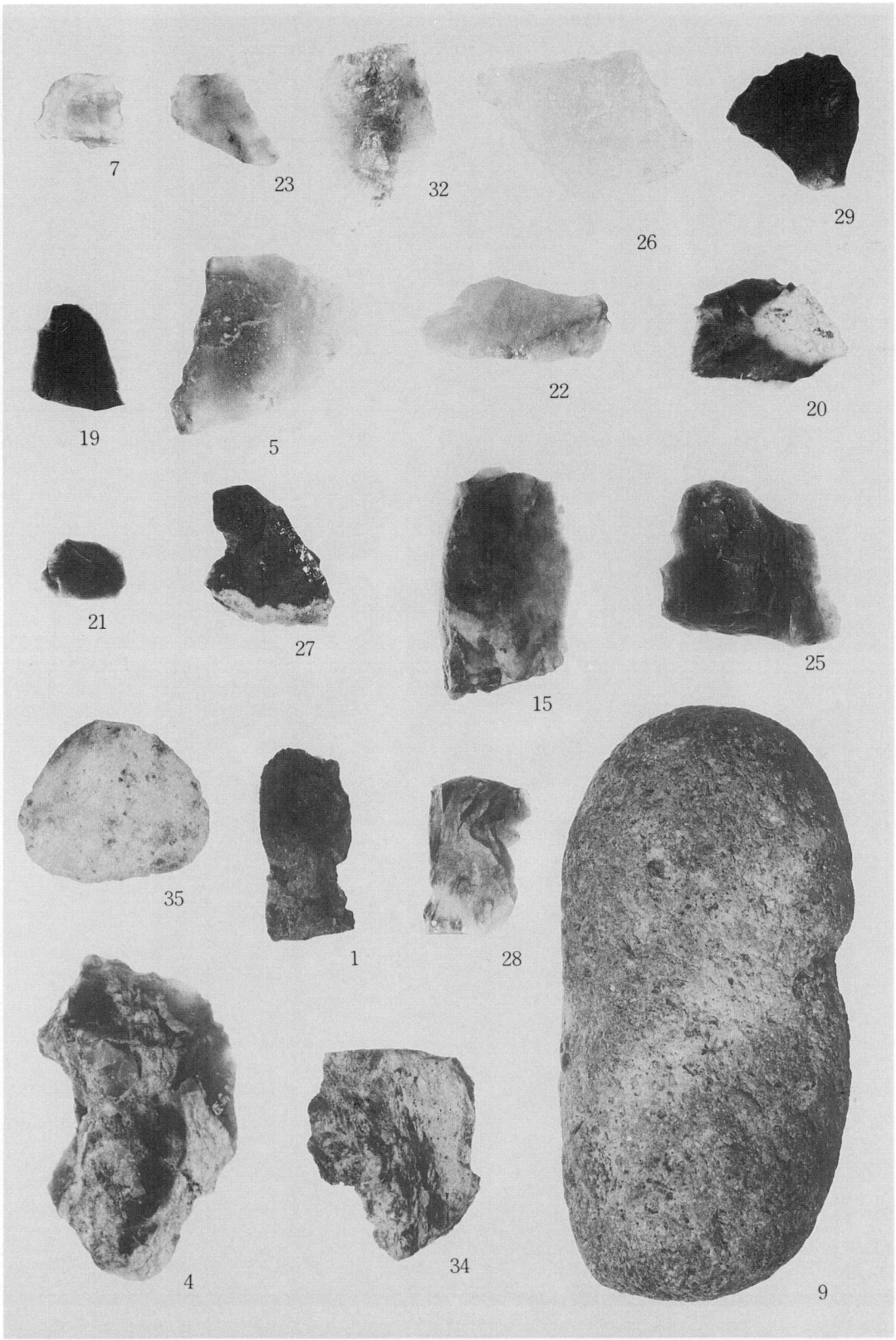
Fig. 12　調査区位置図

[注]

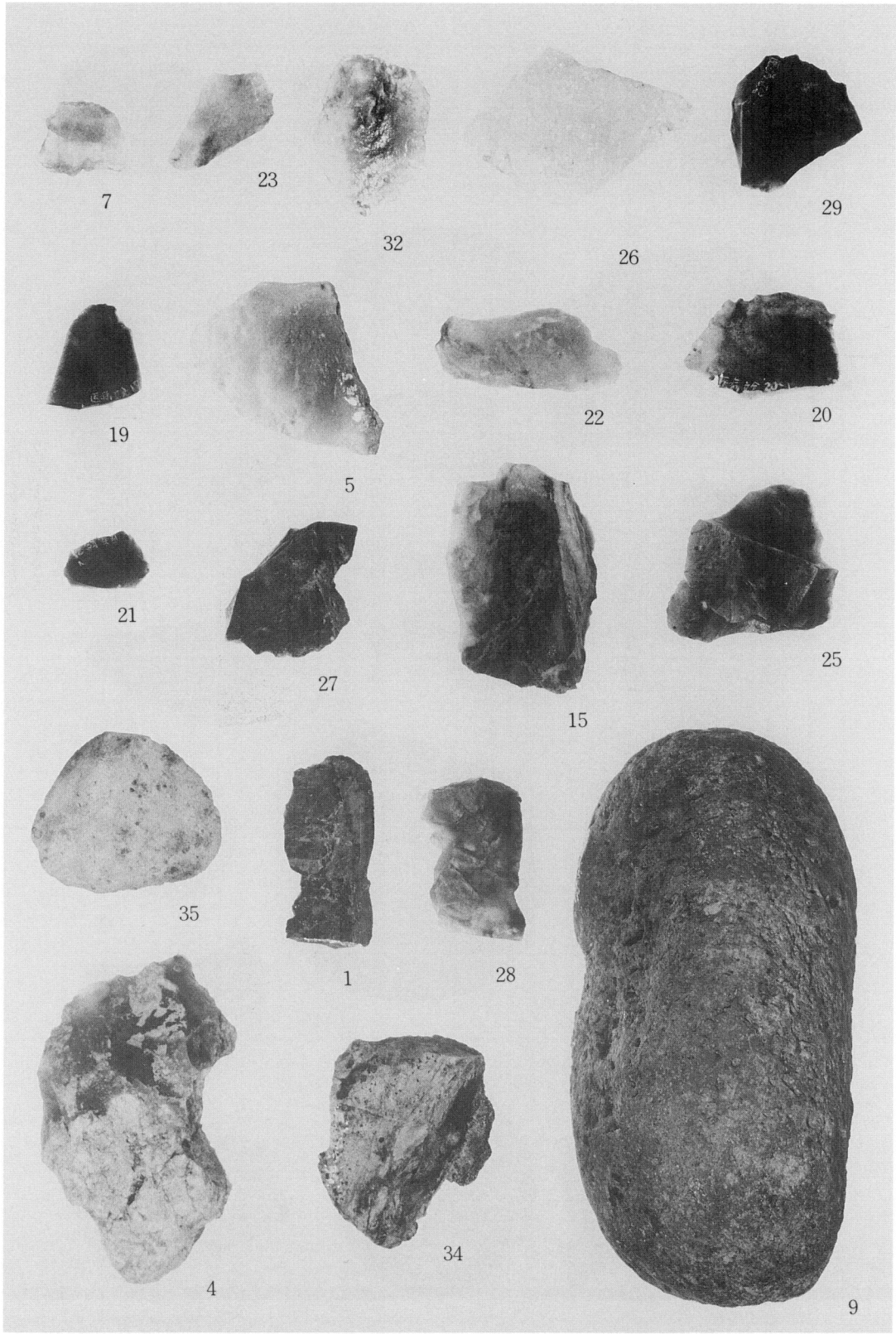
1)　山口大学埋蔵文化財資料館「医学部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

小串構内（医学部・同附属病院・医療技術短期大学部キャンパス）全景（南西から）

PL. I



医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査出土遺物(表)



医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査出土遺物(裏)